



平成 28 年 11 月 11 日 クオケアにて

高木 伸齊さん

(株式会社 LSH Quocare ①) 所長

大学では詩、小説、脚本などを学ばれました。大学卒業後、家電量販店でのアルバイトを通して、人と関わるという部分を切り取って仕事にできないかと、ヘルパーの資格を取得。その後、図書館で福祉関係の書物を読む中で糸賀氏の思想に触れ、また以前からも縁のあった滋賀で働こうと思いい立ち、単身滋賀へ、社会福祉法人しが夢翔会に就職されます。入職後、ヘルパーとして勤務された後、相談支援事業に携わられるようになりました。その中でのある利用者さんとの出会いを通して、MMKサークル②を立ち上げられ、精力的に活動。MMKのような当事者主体の活動を更に深めたいとの思いから夢翔会を退職し、独自にQuocare(以下、クオケア)を立ち上げられました。

その人自身と出会っていたという感じでしたね

廣岡 福祉の「ふ」の字も全く知らないままのスタートだったということですが。

高木 知識がないから、固定概念が全然なかったの、自閉症だからこういう支援をと思って対応していたわけではなくて、その人自身と出会っていたという感じでしたね。例えば、行動にすぐく時間のかかる人へ寄り添うことも、僕はしびれを切らせるようなことは全然なくて、その人はそのペースで生活をしている人だから、自分の考えるペーシングを強制するのは違うだろう、みたいな感じで関わってましたね。

山本 その人はその人、ということですね。

高木 そうですね。言葉での会話があるうがなからうが、その人と話すために何かツールが要るならそうしよう、みたいな感じですね。

廣岡 その感覚は、どのように築かれていったのでしょうか。

高木 大学の時は、作品を書くために「観察」していました。日常のこともアンテナの感度を高くして、みんなが気付かないところを書いていく、同じ景色をどう違うふうに見るか、みたいなのはずっと意識しながらやっていたので、

もしかしたらそれが役に立っているのかなと考えることもあります。後付けのような気もしてて（笑）。

気付いた自分がやらんとあかんよね、

目の前で悩んでいる人がいるから

→ MMKの始まり

廣岡 ところで、MMKサークル立ち上げの経緯は？

高木 ヘルパーとして関わっていた利用者さんで、後にMKの中心になる人なんですけど、その人から「むらむらすんねん」「もんもんとすんねん」「彼女どうしたらいい？」「エッチな本見たいけど、みんなが反対するねん」と、ずっと相談されていました。何とかしないとと思うものの、上手い解決方法もなく、はぐらかし続けてたんです。でも、はぐらかし続けてたら何も解決しないままストレスが溜まって、生活に必要な活動ができなくなりました。「むらむらする、もんもんするから行かへん」って。いよいよどうしよう、と思いました。

その時に、障害のある人の性はきちんと取り組まないとかあかんと思ったものの、心のどこかに、誰かに任せたい気持ちはありませんでした。でも、誰もやる人がいないなら自分がやるしかないんやろうなと思って。上司にこのエピソード

を話して、「どうしたらいいですか？マンツーマンで学習するので、どうも違う気がするんです」と相談したら、「グループを組んでみるか」と、ヒントをもらいました。それで、他の法人の事業所からも同じような性のトラブルとか、悩みを抱えた知的障害のある青年を紹介してもらって、僕がコーディネーター役でグループワークをやってみた、というのが始まりです。

山本 初回は、どんな取り組みを？

高木 まず、何に悩んでるか具体的に把握するために、「自分たちは何に悩んでるのか」を掘り起こすことが必要だと思いました。それから、ずっと勉強というのも参加意欲につながらないと思って、半分はカラオケを楽しもうという呼びかけ方をしました。場の工夫としては、性の話は不特定多数の人の中ではしないという意味で、カラオケルームで設定しましたね。

初回は「みんな、エッチなことに興味ある？」というところから入ると、僕がヘルパーとして関わってたAさんから「エッチなDVDが見たい、でもみんな反対する」とい

う悩みがずっと出た。それに対して、Bさんは「そんな家で見たら言われるに決まってるやん、俺はポータブルDVDプレーヤーをショートステイに持って行ってんねん」と。すぐに「それ！採用！それで行こう！」みたいな(笑)。思った以上に、初回から話はずんだのは、やっぱりみんな男だった、と言うしか(笑)。みんなそういう話になると活き活きするというか、自分の意見をぶつけたという勢いはすごいです。すぐにこの話し合いの成果が出たのは、自閉症スペクトラムのCさんでした。彼は一度強い刺激が入ったら、そればかり続けてしまう人で、当時、いわゆるテレビの放送禁止用語を職員に連発してリアクションを楽しむ行動がありました。でも、MMKで「それってこういう意味の言葉なんやで」と一から話をしたら、その行動がなくなっただけです。単純に、その意味がわからないまま周囲に言ったら大きなリアクション返ってきておもしろかった、ということだったようです。

参加者を紹介してくださった他の法人の事業所の職員さんたちもMMKの趣旨に共鳴してくださって、ボランティア

- ①株式会社LSH Quoccare・・・平成二八年開所。就労継続支援B型、日中一時支援、移動支援、相談支援等様々な事業を展開。
- ②MMKサークル・・・もてて(M)、もてて(M)、困っちゃう(K)サークル。

性や身体の悩みについての解消を目指して、二〇一〇年に発足。二〇一二年にはNHKのテレビ番組『バリバラ』で紹介される。二〇一四年度には『糸賀一雄記念しが未来賞』を受賞。

アのような形で活動をお手伝いしていただきました。「自覚者が責任者」と言い換えられるのか、気付いた自分がやらんとあかんよね、目の前で悩んでいる人がいるからと、踏ん張って形作ってきました。

山本 今は、どれくらい頻度で？

高木 月に一回です。活動を重ねる度にどんどんグループとしても進化していて、支援者側も意図して、彼らに任せていけるところは任せていこうと、毎年いろんなテーマや仕掛けを用意しています。今まで、年間スケジュールはみんなで決めていましたが、その活動はどこに集合して、いくらお金が必要で、どの電車に乗るかを決めていたのは支援者だったんです。でも、今年度からはそこもメンバーに渡して、「MMK会議」で決めていきます。その中で、一〇〇回までもうちよつとじゃないかな、パーティーせなあかんという意見も出てました。

山本 それはそれは。一〇〇回記念ですね。

廣岡 そのMMKの魅力は？

高木 僕も、他のスタッフもボランティアさんも、「ここに来れば素直になれる」と、同じ感想を持ちます。それはきつと、メンバーが作ってくれる雰囲気からくるものですが、まずメンバーがほんとに素直に自分の気持ちを発信してくれるので、一緒に活動する時間は僕らもまもっている

ものを脱いでいられるんだと思います。そこが一番の魅力ですかね。

廣岡 MMKを始めてから、高木さんの中での変化は？

高木 めちゃくちゃあります。親からは学生時代、「あんたは人と関わるのが苦手やから、工場で仕事したら？」って言われてたんですよ（笑）。そんな自分が、障害のある人と関わる中で、彼らにそれを変えてもらったのかもしれないです。ずっと福祉の仕事を続けていけるとは思っていなかったんですが、MMKがあつて、背中を押されて、自分が気付いて、やらなあかん仕事があると自覚できたことで、「一生この仕事で食べていく」、「よし、やれる」し、「やりたい」と思えるようになりました。その上で、この先も大きな法人で働くのか、自分がやらなあかん仕事を突き詰めるのかということを考え出しました。幸い、MMKで培った感覚、活動に共感してくれ、その実践を深めていこうと言ってくれる仲間がいたこともあり、決断することができました。

廣岡 人とのつながりを大切にされる高木さんだからこそなんでしょうね。

高木 この仕事が好きということは、周りにいるみんなと丁寧に確認し合ってきました。一人ではとても踏み出すことはできなかったので、本当にありがたいです。

「つながる」「ありのまま」「自分で決める」

→MMKで得たノウハウをもとに→

廣岡 クオケア立ち上げの経緯は？

高木 MMKは性教育から始まっているので、はじめの一年半はずっと性教育をしてたんです。それが終わると、Aさんが「性の悩みが〇〇から半分に減った」と、自分で言われました。そのあたりから、「仲良くなった、この友だちでいるんなことチャレンジしたい」ってなったんです。性教育は必要でしたが、もしかしたら障害のある人って、そういうつながりや仲間を求めている、それが問題の根底にあったんじゃないか、そこを僕らは支援していかなければならないんじゃないかと気付いたんです。あともう一つ、ヘルパーや親が「不潔だから風呂入りなさいよ」と言ってもなかなか難しかった方が、MMKの中で女性スタッフから「やっぱりくさい男の子嫌いやわ」と言われて、すぐにお風呂に入れるようになったんです。こういう、「自分で自分の行動のスイッチを押す」こと。結局これ以上に強いものはないというか、それだけあれば万事うまくいくのでは、くらいに僕は思っています。そういう場面をいかに作れるかが支援者の役割だろうと思ってるんです。

山本 主役は利用者さん、支援者はそれを可能にする場面

を作るということですね。

高木 それを本当に大事にしてきました。それから、障害のある人の余暇についても、MMKのメンバーの姿を見て気付きがありました。今、障害児の療育活動である「放課後等デイサービス」がものすごく増えていきますけど、一八歳になった途端、職場と家庭の往復になってしまうケースが多い気がしています。成人期の余暇の資源のなさに加えて、その中身を深められているサービスが少なかったことは、相談員の立場としても悩むところでした。MMKの活動を通して見えていた、居場所や場面を丁寧に作り、仲間同士でエンパワメントを高めていくという流れをしっかりと実践し、広げたいという思いがあり、日中一時支援の制度を活用して形にしていこうことを思いつきました。MMKのように同じ目的の下に集まった仲間なら集団形成しやすいと思ったので、月曜日から金曜日まで、それぞれファッションの日、レジャーの日、ライフの日、ゲームの日、オタクリエイトの日とテーマを設定して、障害のある青年成人期の人たちが集える場所として、クオケアカルチャーセンターと名付けて活動を始めました。その日新しさから、新聞取材にも来ていただきました。

山本 カルチャーセンターと聞くと、ぐっと身近な響きになりますね。

高木 そうですね。登録している人は、月に一回の日曜日開所の日にも来られます。今度は鍋パーティーなんですか、二〇名近い参加希望者がいます。

将来的には、療育活動の一環くらいにまで質を高めたいなど思っていて、個人の記録とは別に、グループとしての記録も作っています。個別支援計画は、もちろんどのサービスでも必要ですが、うちでは独自に「グループ支援計画」も立てています。あくまで独自にやっているもので、強制されるものではないし、手間もかかるのですが、プライドを持ってというか、先をちゃんと見据えて理論化、体系化、そして汎化していけるようにと、全スタッフ意識しながら取り組んでいます。

廣岡 今、クオケアを立ち上げられて大切にされていることは？

高木 MMKでの活動を通して、「つながる」「ありのまま」「自分で決める」という三つの理念を立てました。支援者の役割はとにかく、社会的なつながり作りと、自分の中のチャンスや可能性とのつながりを支援することだと思っています。

それから、強みを見つけていくこと。寄り添い、見立てながら、それぞれに合った活躍の場を作っていくことを大切にしたいという想いを込めて、「ありのままを支援する」

というところは大事にしています。例えば、あるMMKメンバーから「仕事したいねん」と言われたんですが、しっかりと話を聴いていくと、お給料をもらえる仕事をしたというイメージで言っているんじゃないかと、「俺も社会的に活躍できるぞ」みたいな雰囲気で行われているんじゃないかと思っただけです。それで、その人が、日中通う施設で周りの重度障害者の方に絵本の読み聞かせをしているとわかったので、「これを伸ばそう！」と。読み聞かせで活躍できるように、地域でボランティアで絵本読みをやっていける先生を呼んで、「絵本読み聞かせ教室」と題して、その方法を学んで、先生と一緒に保育所や老人の施設に発表に行く、という場を作りました。今はもう一人、「俺もやるわ」と手を挙げた友だちがいて、二人組ユニットとして、いろいろな所に出向いています。

あとは、自己決定ですよ。自己決定にかなうものはないので、自分で決めるということに僕はほとんどん付き合いたいと思っています。

出す、知ってもらう、自信を持ってやれる

↳ 発信の大切さ

廣岡 MMKもNHKのバリバラで取材されたりとか、注

目されることが多いですね。

高木 初期から、発信が大事だなと思って、意識してとても頑張ってきたんです。自分たちの取り組みがある種先進的だという自覚もあったし、いろいろとレポートを出したりしてきたんですけど、そういう機会がないと、まとめないじゃないですか。僕ら支援者としても、ある程度活動が積み重なったタイミングでまとめて発表の場に出す、知ってもらおう、そこでもし評価いただけたら、次も自信持つてやれる、というのを繰り返してきました。その中でメディアの取材もあり、更に自信がつく。同じことがメンバーにも言えると思うんです。だからMMKのメンバーが登壇する機会も、できる限り作っているんですよ。区切りにもなるし、「俺らのやっつてることが、間違いなく、合ってるやん！」みたいな自信にもなる。それで、また次のステップに進めますよね。

廣岡 発信力、理論化するということは、文章を学生時代に学んでこられたことが活かされてるんですかね。

高木 親からは「何のために大学に行ったんや」「全然仕事に活かされていないやんか」と今でも怒られることがあるんですけど、支援計画とか、あと、実践発表や論文の依頼をいただいた時には、生きてるなと思いますね。

岡本 忙しいのにすみません。

高木 あ、彼はMMKの初期メンバーの一人なんです。

廣岡・山本 はじめまして。

岡本 ユーチューバーなんですよ、一応この仕事でユーチューブやってるんで、またお願いします。(名刺交換)

廣岡・山本 ありがとうございます。(名刺交換)

高木 岡本さんに合う仕事がないかなと思って探していたんですが、今流行りのユーチューバーなら、と思って。事業所の広報のお仕事としてユーチューバーをやってもらっていて、事業所の中で日頃やっていることや、面白い企画などを通してその魅力を紹介してもらっているんです。

事業所のランドマークに：

廣岡 今、試行錯誤中ということですけども、今後の展望は？

高木 つい先月末、ひきこもりの方を呼んで居酒屋企画をやってみたんです。カルチャーセンターに、ひきこもりの知的障害のある方が何人か通ってくれていて、「学校には行けてないのに、カルチャーセンターの出席率はナンバーワン」だったりするんですね。それはきくと、僕らが意識しないところで、彼に必要なものが提供できているんやろうな、と思いました。「それって何やろう、もしかすると、

障害のあるなしにかかわらず、何かしら僕らの持っているものでお手伝いができるんじゃないだろうか」とスタッフ間で話していて、「じゃあ何かやってみよう!」と。とりあえず、通販サイトのAMAZONで提灯を買ってみました(笑)。ここから何が始まって、つながっていくのか、それとも終わってしまうのか、やってみないと全くわからないですけど、せっかく大きい法人を出たので、コンパクトに思いついたことはどんどんやりたいなっていうのはありますね。

廣岡 その行動力がすごいですね。

高木 やれることを、やれる範囲でやっているだけなので。MMKで培ったもの、理念みたいなものは、果たしてどこまで通用するのかなと不安にもなりますが、だからこそ滋賀県内だけじゃなくて、いろんなところに活動を発信していくのもおもしろいかなと思ってるんです。大きいことを言えば、障害福祉の仕事って、他の福祉の分野でも活躍できるようなノウハウというか、考え方が詰まってると思うんですね。声なき声を聴いて、徹底的にご本人に寄り添っていく。そこから実践を発信して、広げて、深めていく流れって、何でも通用すると思うんですね。障害福祉は堂々と取り組んでいい仕事なんだということは自分の生涯をかけて伝えていきたいし、そのランドマークというか、中心

になるような事業所になっていけたらな、と思っっています。けれど、特定の事業所だけをとことん大きくするというよりは、僕らの感覚がいろんな所に散らばってほしいと思います。実際、県内だけでなく、県外でもMMKを作ってくれる所があることは本当にうれしいです。

廣岡 既に広がりつつあるんですね。

高木 そうですね。少しずつ広がってはいるんですけど、でも、やっぱりしっかり長続きする土台が上がるまでが難しいというお話も多くて。なので、「こういうタイミングで、こんな介入があったらいいかもしれないですよ」ということを僕たちがアドバイスしに行けると、もっと広がっていくのかもしれないと思うんですけどね。いつかは、僕らの実践から生まれた「知的障害のある人の仲間づくり」について、まとめてお伝えできるような本を書いて、たくさんの人に共感していただきたいというのが、今の具体的な夢ですね。

廣岡 夢がどんどん広がりますね。今日はいろいろお話をきかせていただいて、ありがとうございます。

高木 こちらこそ、好きなことお話しさせてもらえて、とてもありがたい時間でした。ありがとうございます。